

プロメテウス解剖学アトラス

頸部/胸部/腹部・骨盤部

坂井建雄, 大谷 修 監訳

＜書評者＞ 佐々木克典（信州大学教授・組織発生学）

解剖学書の生命は挿入された図にある。図を1枚見ただけで、どの解剖学書かすぐわかるほど、風雪に耐えた解剖学書の図は個性的である。これまでさまざまな意匠の図が多数描かれており、「これ以上新しい図が登場することはないだろう」と思っているが、『プロメテウス解剖学アトラス』の図のように、私どもの想像を超えたさらに衝撃的な図が生まれてくる場所にこの領域の面白さがある。

本書の図の特徴は、透明感である。ギリシャ神話に登場する女神や妖精が透けた衣類を身につけ、舞うようなイメージの図が数多く挿入されている。この透かしの技法は日本の芸術にも時折みられるが、ヨーロッパが得意とするものであり、カメオ職人が、自分が彫った妖精をみせながら、透けている状態を掘り出す難しさを、熱を込めて語ってくれたことを思い出す。この技法は1枚の図の中で、お互いの臓器の関係、特に裏側にある

血管との関係を表現するために極めて有効に使われており、その描き方はまさに芸術である。

臓器を包む結合組織でできた膜の解剖は臨床的アプローチ、特に剥離操作に欠かすことができない。しかし、解剖図の中でこれを描き出すのは至難の技であり、図式的なものはあるものの、リアルなタッチで描くことに成功した解剖書は極めて少ない。本書は、この困難な問題をクリアした稀有な解剖学書であり、頸部や骨盤構造を包む複雑な膜構造を実に明快に写実的に描き分けている。

人体の構造は決して平面的あるいは平行に存在するわけではなく、三次元的構造の中で複雑に綾を成している。解剖の難しさ、面白さはまさにこのクロスを理解することにあり、同時に臨床に欠かせない情報となる。しかし、この複雑な構造をすべて描き出しても、かえって混乱させるだけである。必要な構造をどのように抽出し、描

き分けるかが重要であり、それが、その解剖学書の意図を鮮明にする。本書は臨床で問題になるクロス構造を実に丹念に取り上げている。例えば、直腸子宮靱帯（基靱帯）とクロスする構造の描き方などは白眉である。こうした図が随所に挿入されており、このアトラスが基礎から臨床への連続性を意図しているのは明らかである。

プロメテウスが意味する“先に考える者”にふさわしく、これまでにない視点から作り上げられたこの解剖学書は、卓越した美しさと目的の明快さで医学を学ぶ人々を圧倒するであろう。解剖学全般に深い造詣を持たれておられる坂井建雄教授、大谷 修教授による優れた監訳は、この新しいタイプの解剖学アトラスを読者により身近なものにしている。解剖学を学び始めた医学生が人体の構造の妙味を知るために、現場に立つ外科医が自らの知識を整理し確認するために、このアトラスを座右に置かれることをお勧めする。

●A4変 頁392 2008年
定価 11,550円
(本体 11,000円＋税5%)
[ISBN978-4-260-00571-5]
医学書院刊